

教育・学

「親亡き後」へ手探り

高齢化で噴き出た不安

昨年11月中旬、宇都宮市内。10数人が集まっていた。

引きこもりの当事者や家族を支援するNPO法人「KHJとちぎベリィ会」(斎藤三枝子理事長)が父親をメインの対象に同年6月から始めた「親父の会」だ。

「家族は意図せずに悪循環を手伝ってしまっている」「コミュニケーションは短く、肯定的に」参加者は、家族とのコミュニケーションの方法や距離の取り方、子どもの問題行動が繰り返される背景について、認知行

危機感

動療法プログラムを二つ一つこなしていった。これまでも時々、ベリィ会の月例会に顔を出していた男性(63)＝県南在住＝の姿もあった。

男性は次男(30)のことで3年ほど前から、さ

ままな組織の会合やシンポジウムに参加し始めていた。東京まで足を延ばすこともあった。次男は大学院を修了したが就職活動がうまくいかず、5年前から引きこもるようになった。暴力などはなく、家では静か

開かない扉

とちぎ・長期化する引きこもり

2

だが、家族との会話はなくなった。

「こうなった原因ははつきりしている。私自身に大きな問題があった。息子が頭が良かったので期待をし、厳しくすぎた」

家庭環境の問題。男性はさまざまな会合に参加し、そこに行き着いた。定年退職し再雇用で働く傍ら、時間を見つけては家族会などに参加する。以前よりもその頻度は増した。

「第三者の力を借りる

の方法。でも最後は家族。若者が能力を生かせないのは、社会にとつても損失。可能性のあることは、ありとあらゆることをやりたい」

昨年9月下旬、ベリィ会は宇都宮市の県精神保健福祉センターで一般向けの「不登校・引きこもり個別相談会」を開いた。相談者は予想の3倍に達した。

「娘は10年間引きこもっている。将来のことを考えると心配で眠れな

い」。

相談者の多くは、20代後半から40代の子どもを持つ親たちだった。

内閣府の引きこもりに関する実態調査(2010年)では、引きこもりは全国に70万人。「全国引きこもりKHJ親の会」の調査では、平均年齢は31歳を超えた。

ベリィ会に関わる約100家族も、当事者、親ともに長期化・高齢化が深刻になっている。親世代は、ほとんどが50代後半から60代にさしかかっている。

「老後や親亡き後の不安が一気に噴き出している。困っている人がこんなにたくさんいる」。斎藤理事長は危機感を覚えた。



引きこもりの家族を支援する勉強会「親父の会」に参加した父親らの多くは50～60代にさしかかっている＝昨年11月、宇都宮市内